

《論 文》

ゲルマン祖語の母音組織とウムラウト（I）

森 基 雄

古代ゲルマン諸語の母音組織は、程度の差こそあれ、ゲルマン祖語の段階からはそれぞれ独自のさまざまな変化をとげているが、本稿ではその中でも特に注目すべき変化の一つとしてウムラウト（Umlaut, mutation, 母音変異）と呼ばれるものを中心に取り上げてみたい。これは強勢を持つ母音に次音節の母音または半母音が影響を与え、異質の母音にする現象である。この現象は東ゲルマン語のゴート語を除くすべてのゲルマン語で実証される。

ウムラウトにはいくつかの種類があるが、本稿ではそのうちの主なものを取り上げていきたい。その主なものとしては、伝統的にはゲルマン祖語に起こっていたとされるもの、そして後にゴート語以外の個々のゲルマン語に起こったとされるものがある。このウムラウトという現象が個々のゲルマン語において実際にどのような現れ方をしているかを、それに付随するさまざまな音変化とともに、具体例を通して見ていくことにする。

その前にまず、ウムラウトが起こる前提となるゲルマン祖語の母音組織が成立するまでの経過を把握しておくことが望ましいであろう。ゲルマン祖語の母音組織の成立を印欧祖語の段階にさかのぼって示すと、それは次のように図示できるのである（Krahe 1969⁷: 56）。

IE	a	e	i	o	u	ə	ɪ	ʊ	ā	ē	ī	ō	ū	ai	ei	oi	au	eu	ou
Gmc.	a	e	i		u				ē	ī	ō	ū		ai			au	eu	

次に、このことを証明する実例を挙げてみたい（以下、本稿ではゲルマン祖語において強勢音節に位置する母音にのみ注目していくことにする）。

まず、上記の印欧祖語の母音のうちゲルマン祖語へそのまま引き継がれたものの実例を挙げてみよう。

IE a > Gmc. a

Lat. ager, Gk. agrós, Skt. ajras, Go. akrs, OI akr, OS akkar, OHG ackar 'field, acre'.

IE e>Gmc. e

Lat. edō, Gk. édomai 'I eat', OI eta, OE, OS etan, OHG ezzan (Go. itan) 'to eat';
Lat. ferō, Gk. phérō 'I bear', Go. bairan, OI bera, OE, OS, OHG beran 'to bear'.

IE i>Gmc. i

Lat. videō 'I see', Gk. ídmen, Skt. vidma, Go. witum, OI vitum, OE witon, OS witun, OHG wizzum 'we know'.

IE u>Gmc. u

Skt. bubudhima 'we announced', Go. budum, OI buðum, OE budon, OS budun, OHG butum 'we announced, offered'.

IE ē>Gmc. ē (ē₁)

Gk. títhēmi 'I put', Go. gadēps (OI dāð, OE dǣd, OS dād, OHG tāt) 'deed'.

IE ī>Gmc. ī

Lat. suinus 'belonging to a pig', Go. swain, OI svīn, OE, OS, OHG swīn 'swine, pig'.

IE ō>Gmc. ō

Gk. plōtós 'swimming', Go. flōdus, OI flōð, OE, OS flōd 'flood, tide'.

IE ū>Gmc. ū

Lat. mūs, Gk. mūs, Skt. mūs, OI, OE, OS, OHG mūs 'mouse'.

IE ai>Gmc. ai

Lat. haedus 'Bock', Go. gaits, OI geit, OHG geiz 'Ziege'.

IE au>Gmc. au

Lat. augeō, Gk. auksánō 'I increase', Go. aukan, OI auka 'to add, increase'.

IE eu>Gmc. eu

Gk. geúō 'I give a taste of', Go. kiusan, OI kiōsa, OE cēosan, OS, OHG kiosan 'to choose'; Gk. peúthomai 'I notice', Go. biudan, OI biōða, OE bēodan, OS biodan, OHG biotan 'to offer'.

他方, 変化したものは次のとおりである。

IE o>Gmc. a

Lat. octō, Gk. októ, Go. ahtau, OS, OHG ahto 'eight'; Lat. hostis 'stranger, enemy', Go. gasts, OS, OHG gast 'guest'.

IE ə>Gmc. a

Lat. pater, Gk. patér, Skt. pitá, Go. fadar, OI faðir, OS fader, OHG fater 'father' (ヒッタイト語の発見により, IE ə は実は喉音 (laryngeal) であったとされている).

IE ʀ>Gmc. ur

Skt. *bhr̥tis* ‘das Tragen’, OS *giburd*, OHG *giburt* (Go. *gabaurþs*) ‘birth’; Skt. *vavṛtima* ‘we have turned’, OI *urðum*, OE *wurdon*, OS *wurdun*, OHG *wurtum* (Go. *waurþum*) ‘we became’.

IE *ǵ* > Gmc. *ul*

Skt. *vṛkas*, Go. *wulfs*, OI *ulfr*, OS, OE *wulf* ‘wolf’.

IE *ṃ* > Gmc. *um*

Gk. *básis* ‘Schritt’, Skt. *gatis* ‘Gang’, Go. *gaqumþs* ‘Zusammenkunft’, MLG *ankumpst* ‘Ankunft’, OHG *kumft* ‘das Kommen’.

IE *ṇ* > Gmc. *un*

Skt. *matís* ‘Gedanke’, Go. *gamunds* ‘Andenken’, OHG *gimunt* ‘Erinnerung’.

IE *ā* > Gmc. *ō*

Lat. *māter*, Gk. Dor. *mātēr*, OI *mōðir*, OE *mōdor*, OS *mōdar* ‘mother’.

IE *ei* > Gmc. *i*

Gk. *steíkhō* ‘I go’, Go. *steigan*, OI *stiga*, OE, OS, OHG *stigan* ‘to ascend’; Gk. *leípō* ‘I leave’, Go. *leihwan*, OS, OHG *lihan* ‘to lend’.

IE *oi* > Gmc. *ai*

OLat. *oinos* ‘one’, Gk. *oínē* ‘the one on dice’, Go. *ains* ‘one’.

IE *ou* > Gmc. *au*

Lat. *rūfus*, Go. *rauþs*, OI *rauðr* ‘red’.

このほか、長い二重母音の IE *āi*, *ēi*, *ōi*, *āu*, *ēu*, *ōu* に関してはゲルマン語における証拠が乏しく、*ēi* が恐らく Gmc. *ē* (*ē₂*) となったほかは、*āi*, *ōi* は Gmc. *ai* と、*āu*, *ōu* は Gmc. *au* と、*ēu* は Gmc. *eu* と融合したとされる。

IE *ēi* > Gmc. *ē* (*ē₂*)

Go., OI, OE, OS *hēr*, OHG *hiar* ‘here’ (Go. *hidrē*, OE *hider*, Lat. *citer*, *citrō* ‘hierher’).

そして以上のようにして成立したゲルマン祖語の母音のうちのあるものは、伝統的にはゲルマン祖語の段階で起こったとされる、次のような変化を受けた。

(1) 次音節に *i*, *j* を伴うとき、Gmc. *e*, *eu* はそれぞれ *i*, *iu* となった (*i*-ウムラウト)。

Lat. *medius*, OI *miðr*, OE *midd*, OS *middi*, OHG *mitti* (Go. *midjis*) ‘middle’; Lat. *est*, Gk. *estí*, OE *is*, OS, OHG *ist* (Go. *ist*) ‘is’; OE *bireþ*, OS *birid*, OHG *birit* (Go. *bairiþ*) ‘he bears’, 不定詞 OE, OS, OHG *beran* (Go. *bairan*); OHG *sihit* (Go. *saihwip*) ‘he sees’, 不定詞 OHG *sehan* (Go. *saihwan*); Gk. *geúō* ‘I give a taste of’, OS *kiusid*, OHG *kiusit* (Go. *kiusiþ*) ‘he chooses’; Gk. *leukós* ‘bright, white’, OS *liuhtian*, OHG *liuhten* (Go. *liuhtjan*) ‘to give light’; Gk. *peúthomai* ‘I notice’,

OS biudis, OHG biutis (Go. biudis) 'you offer'.

(2)Gmc. e は鼻音プラス子音の前でも i となった。

Lat. ventus, OI vindr, OE, OS wind, OHG wint (Go. winds) 'wind'; Lat. offendix 'knot, band', Gk. pentherós 'father-in-law', Lith. beñdras 'companion', OI binda, OE, OS bindan, OHG bintan (Go. bindan) 'to bind'.

この(1), (2)の変化は非常に規則的に起こった。また言語によっては単一の m の前でも e は i となった。

OI nema, OE niman, OS niman, neman, OFris. nima, nema, OHG neman (Go. niman) 'to take'.

しかし単一の n の前では e のままである。

OE cwene, OS, OHG quena (Go. qinō) 'woman'.

(3)次音節に u を伴うとき, Gmc. e, eu はそれぞれ i, iu となった (u-ウムラウト)。しかし同じ e>i, eu>iu という変化ではあっても, この条件下でのこの変化がはっきりと共通して現れているのは古サクソン語と古高地ドイツ語においてのみのようである。

OI siðr, OE, OS sidu, OHG situ, OFris. side (Go. sidus) 'custom'<Gmc. *seduz? (Gk. éthos); OI fiql, OE feolu, OS, OHG filu, OFris. felo (Go. filu) 'much'<Gmc. *felu; OI miqðr, OE medu, OHG metu, mitu, OFris. mede 'mead'<Gmc. *meduz (Lith. medūs 'Honig', Gk. méthu 'Wein'); OS fehu, OHG fehu, fihu (Go. faihu, Lat. pecu) 'cattle'; OS, OHG biru (Go. baira, Lat. ferō, Gk. phérō) 'I bear'; OS wirthu, OHG wirdu (Go. wairpa) 'I become' (Lat. vertō 'I turn'), 不定詞 OS werthan, OHG werdan (Go. wairpan); OS biudu, OHG biutu (Go. biuda) 'I offer' (Gk. peúthomai 'I notice'); OS tiuhu, OHG ziuhu (Go. tiuha) 'I draw, lead' (Lat. dūcō 'I lead'), 不定詞 OS tiohan, OHG ziohan (Go. tiuhan).

そしてこれらのうちでも動詞の 1 人称単数現在の例における e>i, eu>iu は, 次音節の u が IE u にではなく IE ō>Gmc. ō (Go. a) に由来する, 後期に発達した u によって引き起こされたものであることは明らかである。

(4)次音節に a, e, o を伴うとき, Gmc. i, u はそれぞれ e, o となった (a-ウムラウト)。

OI verr, OE, OS, OHG wer (Go. wair) 'man'<Gmc. *wiraz<IE *wiros (Lat. vir); OE, OS, OHG nest 'nest'<Gmc. *nistaz<IE *nizdos (Lat. nidus, Lith. lizdas); OI boðinn, OE boden, OS gibodan, OHG gibotan (Go. budans) 'offered' (過去分詞), しかし過去複数 OI buðum, OE budon, OS budun, OHG butum (Go. budum) 'we offered'; OI morð, OE morp, OS morth, OHG mord 'murder'<Gmc. *murðan<IE *mṛtom (Skt. mṛtam 'Tod'); OI dōttir, OE dohtor, OS dohtar, OHG tohter (Go. dauhtar) 'daughter'<Gmc. *duhtēr (Gk. thugatēr, Skt. duhitā, Lith. duktė).

ただし、その a, e, o の直前に j または鼻音プラス子音を伴う場合を除く。

OI bundinn, OE bunden, OS gibundan, OHG gibuntan (Go. bundans) ‘bound’ (過去分詞)。

しかし a-ウムラウト、特に i の a-ウムラウトの場合には例外が多い。しかも強変化動詞第 1 類の過去分詞においてはこの変化はまったく現れていない。

OI fiskr, OE fisc, OS, OHG fisk (Go. fisks) ‘fish’ < Gmc. *fiskaz (Lat. piscis); OI skip, OE scip, OS skip, OHG skif, skef (Go. skip) ‘ship’ < Gmc. *skipan; OI spik, OE spic, spec, OHG spec ‘bacon’ < Gmc. *spikan; OI vita, OE, OS witan, OHG wizzan (Go. witan) ‘to know’ (Lat. vidēre ‘to see’); OI drifinn, OE drifen, OS gidriban, OHG gitriban (Go. dribans) ‘driven’; OI gripinn, OE gripen, OS gigripan, OHG gigrifan (Go. gripans) ‘gripped’.

u の a-ウムラウトは単一の鼻音の前では、そして前後に唇音を伴う文脈においてしばしば欠如している。

OI gumi, OE guma, OS gumo, gomo, OHG gomo, OFris. goma (Go. guma, Lith. žumuō) ‘man’; OI koma, OE cuman, OS kuman, OHG koman, kuman, OFris. kuma, koma ‘to come’; OI fullr, OE full, OS, OFris. ful, fol, OHG fol (Go. fulls) ‘full’ < Gmc. *fullaz (Lith. pilnas); OI ulfr, OE, OS wulf, OHG, OFris. wolf (Go. wulfs) ‘wolf’ < Gmc. *wulfaz (Skt. vr̥kas).

(1), (2), (4) は伝統的にはゲルマン祖語の段段で起こっていたとされている。また Antonsen (1961: 218), Marchand (1957), Moulton (1961: 6-12) などのように、(1), (2), (4) のほか (3) をゲルマン祖語に仮定することにより、Gmc. /u/ (< IE u, r, l, m, n) が Gmc. /u~o/ となっただけでなく、それに平行して、Gmc. /i/, /e/ が融合して同一音素、すなわち Gmc. /i~e/ となったとする学者もいる。

確かに(1), (4)は北、西ゲルマン語に共通して現れているけれども、Bennett (1952), Cercignani (1979, 1980) の言うように、ゴート語における独自の状況から見て、(1), (4)がゲルマン祖語に起こっていたとは考えにくい。

まず Gmc. /e/, /eu/, /i/, /u/ の分布はゴート語と北、西ゲルマン語とでは明らかに異なっている。すなわち Gmc. /e/, /i/ はともにゴート語では次音節の母音とは無関係に r, h の前では ai[e], それ以外の子音の前では i として現れる。例えば、前者の例としては bairip ‘he bears’, saihwip ‘he sees’, wair ‘man’, laihwum (OS liwun, OHG liwum) ‘we lent’, 後者の例としては itan (OI eta, OE, OS etan, OHG ezzan) ‘to eat’ がある。Gmc. /u/ も同様に次音節の母音とは無関係に r, h の前では au[o] となり、それ以外の子音の前では u として現れる。例えば、前者の例としては waurpum (OI urðum, OE wurdon, OS wurdun, OHG wurtum) ‘we became’, tauhum (OE tugon, OS tugun, OHG zugum) ‘we led, drew’,

後者の例としては budans ‘offered’ (過去分詞) がある。また Gmc. /eu/ は、例えば kiusan ‘to choose’, tiuhan ‘to lead, draw’ のように、ゴート語ではいかなる環境にあっても iu である。従って Bennett (1952) もはっきりと主張しているように、Gmc. e, eu, i, u はゲルマン祖語の段階では無変化だったのであり、(1), (4)のウムラウトは北、西ゲルマン語の段階になって初めて起こったものであり、bairan, bairip, saihwan, saihwip, faihu, budans におけるような ai[e], u は Gmc. /e/, /u/ が何の変化も経ずにそのまま引き継がれた結果であると考えられるのである。結局、すべてのゲルマン語に完全に共通して現れているのは(2)のみであり、従ってゲルマン祖語で起こっていたと考えてよいと思われるのはこの(2)のみであろう。そして $u > o$ という変化に関して注目すべきことは、北、西ゲルマン語とゴート語のいずれにおいてもこの変化により、IE o がすべて Gmc. a となっていたためにゲルマン祖語において欠如していた o の音が充足されたということである。

また、すでに見たように、(4)には例外も多く、(3)も実際に起こっているのは古サクソン語と古高地ドイツ語においてのみのようであることから、Twaddell (1948 : 142, 145) はゲルマン祖語には Gmc. /i/ と /e/ の融合はなかったとしており、Fourquet (1952 : 130-1) は Gmc. /i/ と /e/ の融合があったのは(3)が規則的に現れる古サクソン語と古高地ドイツ語においてのみであったと考える。

しかし(4)が実際に欠如している a-語幹名詞の例が多いのは、次音節の a-ウムラウトの要因がその a-ウムラウト後に消失し、a-ウムラウトによる結果音が異音から音素になった後、類推による水平化が起こったためであるとする学者もいる。Marchand (1957) は a-語幹名詞における i の a-ウムラウトの例外は、その名詞の活用において次音節に来る母音が a-ウムラウトを起こす母音ではなかったため a-ウムラウトが起こらなかった屈折形の i が、a-ウムラウトによる e を元来持っていた他の屈折形を圧倒し、そのすべての屈折形に一般化されたことに起因すると思われる。

Marchand (1957 : 349) は例えば OHG skif, skef という二重形が存在する根拠として、そのゲルマン祖語の単数形が次のような形であったためとしている。

主格単数 skepaz

属格単数 skipeza/iza

与格単数 skepōi

所格単数 skipi

しかし属格単数にはむしろ *skepas/za を想定すべきであろう。また Lloyd (1966) が指摘するように、a-語幹名詞において a-ウムラウトを起こさない要素が後続する所格単数はたとえ存在していたとしてもきわめてまれであるため、a-ウムラウトの欠如を所格単数への類推による水平化によって説明することは不可能のように思われる。

また強変化動詞第1類 (OHG ritan ‘to ride’, reit, ritum, giritan) の過去分詞における

i の a-ウムラウトの欠如を過去複数への類推によって説明することは不可能であろう。なぜならば, Lloyd (1966 : 739) の言うように, a-ウムラウトの有無に関して同じ環境にあるはずの強変化動詞第2類 (OHG liogan 'lügen', loug, lugum, gilogan) にはそのような類推は起こっていないからである。

このほか i に代わる e の実例として, ラテン語からの次のような借用語が挙げられる。

OI klefi 'closet' (Lat. clibanus); OE peru 'pear' (Lat. pirum); OHG pescen 'to fish' (Lat. piscare); OE segn, OS, OHG segan 'blessing' (Lat. signum); OS bikeri, OHG behhari 'goblet' (Lat. bicarium); OE cest, OHG chista 'chest' (Lat. cista); OE, OS senep, OHG sinaf, senaf 'mustard' (Lat. sinapis).

しかし Lloyd (1966 : 741) の言うように, これらは俗ラテン語における $i > e$ という発達を反映しているとみなすことができるため, a-ウムラウトの例としては除外されるべきであろう。Lloyd は本来語における $i > e$ の変化は a-ウムラウトによる変化であるとする従来の見解を否定し, それは systemic analogy によるものであると考える。この点について Lloyd (1966 : 738) は次のように説明している。

It can be shown that the partial overlapping in Germanic of the two phonemes /i/ (represented in all environments by [i]) and /e/ (with the allophones [i] and [e]) led to the occasional development of an *e*-allophone of /i/ by a type of systemic analogy.

すなわち Lloyd によれば, $i > e$ の変化は次のような公式によって導き出される。

IE e: Gmc. *felljan- > OHG fillen 'to skin': fel 'skin'.

IE i: Gmc. *nistjan- > OHG nisten 'to nest': X.

従って X は本来であれば *nist となるところが nest ということになり, 本来あったはずの *nist がこの systemic analogy により nest に取って代られたというのである。

Lloyd (1966 : 743) はこれに類する例として, 古高地ドイツ語からの次のような例を挙げている。

1. Gmc. a, ō, æ の前で

A. IE e

fel 'skin'

weg 'way, path'

berg 'mountain'

erda 'earth'

B. IE i

2. Gmc. i, ī, j, (u) の前で

fillen 'to skin'

āwiggi 'pathless'

gibirgi 'mountain range'

irdisk 'earthly'

*nist, [nest] 'nest'	nisten 'to nest'
*spic, [spec] 'bacon, lard'	ubarspicki 'fat'
(OE spic, spec)	
*quic, [quec] 'living'	irquicken 'to revive'
skif, [skef] 'ship'	skiflin 'little ship'

すなわち、a-ウムラウトが否定されるならば本来現れるべきである *nist, *spic, *quic, skif に代る, nest, spec, quec, skef という形は一種の systemic analogy による逆形成によるものであったというのである。しかし Connolly (1977: 176-7) の言うように, nisten, ubarspicki, irquicken, skiflin のような語はそのような類推による逆形成を引き起こすほど頻繁に現れる語であったとは考えにくい。

Connolly (1977, 1979, 1980, 1984) はこの必ずしも規則的ではない $i > e$ の変化は i に印欧祖語の喉音 (laryngeal) が隣接していたことによる変化であると考え。そして Connolly は少なくとも喉音 (X) には、母音の音色を変えないもの (E), 隣接の /e/ を [a] として具現化するもの (A₁), 隣接の /e/ を [a] として具現化し、ギリシア語とサンスクリット語では先行する p, t, k を ph, th, kh に変えるもの (A₂), 隣接の /e/ を [o] として具現化するもの (A^w) があったとしており、IE i に由来するとされる e は実は IE Xi という音結合であったという。Connolly は $Xi > e$ を反映すると思われる多くの実例を挙げており、また Xi の反映であることをより確かなものにするために、それと同根であり母音度の異なる交替形として、 $Xi (> Gmc. i)$, $eXi (eEi > Gmc. i)$; eAi , $eA^wi (> Gmc. ai)$ を持つと思われる形も同時に挙げている。以下その主ないくつかのものを挙げてみよう。

①OI verr, OE, OS, OHG wer, Lat. vir 'man' がゼロ階梯の IE *wXiros に由来し、Skt. viras, Lith. v́yras のように IE i を持つ形が弱化階梯の IE *w_eXiros に由来するとみなせるならば、喉音のかつての存在がより確実なものであったと考えることができる。

②OE clifian, cleofian, OS klibon, OHG klebēn 'adhere' は IE *glE-i-bh- に由来し、以下その同根語の OHG kleiben 'fasten' は IE *gloE-i-bh- に、OHG kliban 'adhere', Lith. gléimės 'slime' は IE *gleE-i- に、OHG klenan 'adhere, smear' は IE *glE-i-n- に由来する。

③OHG skif, skef 'ship' は Gk. skhízō 'split', Skt. khidati 'depress', OHG scina, scena 'shin, rail', OHG scetar 'thin, having gaps', OHG scidōn 'depart', MHG schit 'separation, distinction', MHG schedel 'skull', OHG scesso '[split] rock' と同根語であり、従って IE *skA₂i- に由来する。そして同根語で強変化動詞第7類の Go. skaidan, OE scādan, OHG sceidan 'separate' は Lat. caedō 'strike' とともに IE *skeA₂i- に由来する。

④OE slipor 'slippery', OHG sleffar 'steep', OI sleði, sliði, OHG slito, slite, MDu.

sled(d)e ‘sled’, OE sliht, OHG sleht ‘smooth, even; bad’ は、同根語の Lat. lēvis, Gk. leios, litós ‘smooth’, Gk. lís, litós ‘smooth cloth’, Gk. olibrós ‘slippery, smooth’, Gk. olisthánō ‘slide’, Skt. sredhati ‘slip up, go astray’, Lith. sliékas ‘night crawler’, Lith. slýstu, slýdau, OE slidan ‘slide’ などから見て、IE *(s)A^wleEi-, *(s)A^wl_oEi-, *(s)A^wlEi- のなかでもゼロ階梯の *sA^wlEi- にさかのぼる。

⑤OE, OS, OHG nest ‘nest’ は *ni-‘down’ プラス *sed-‘sit’ のゼロ階梯に由来するが、それは同根語である Lat. nidus, Lith. lizdas ‘nest’, Arm. nist ‘seat, residence’, OI neðan, OE niðan, OS nithana, OHG nidana ‘von unter her’, OI neðar, niðar ‘abnehmender Mond’, OI neðri, neðarri, niðri ‘nieder’ などとともに IE *nEi-t- にさかのぼり、同じく同根語である Gk. nēista ‘niedrigste’ は IE *neE(i)- にさかのぼると思われる。

⑥OI dvena (dvina, dvīna) ‘erschlaffen, schwinden’ は IE *dhwe-i-n- に、OIr. dith ‘Tod’ は IE *dhweE-i-tu- に、Skt. dhūmas ‘Rauch, Dampf’ は IE *dhuE-mo- に由来する。

さらに Connolly (1977) は逆に a-ウムラウトの環境にありながら i>e の変化をどのゲルマン語も示さない例は喉音を伴っていなかったようであることも語源的に確認している。

また②, ④で示したように、Connolly は IE *gleE-i-bh- > OHG kliban, IE *sA^wleEi-dh- > OE slidan というように、従来の IE ēi > Gmc. ē₂ ではなく IE eEi > Gmc. i という公式を前提としている点が注目される。

しかし、これまで主張されてきた a-ウムラウトに代わるものとして Connolly が提案したこの理論が信頼するに足るものであるためには、そのすべての例が語源的に喉音を伴っていたということ、そしてそれを裏付ける根拠として他の語派との語源関係が完ぺきに証明されねばならないところである。実のところ Connolly 自身も語によってはその作業において困難に陥っている場合も見られ、それらしきすべての例を彼の理論で正確に網羅できるのかどうか疑問が残る。また仮に i>e の変化と喉音の分布が一致していると思われる例が多いからと言って、i>e の変化が a-ウムラウトではなく、もっぱら喉音に起因すると断定してよいものかどうか疑問である。

Cercignani (1980 : 126) は i>e の a-ウムラウトという現象を容認しながらも、同じ a-ウムラウトでも u>o のそれは比較的規則正しいのに対し、i>e のそれが比較的まれである理由を次のように説明している。

The scarcity of forms with /e/ by *a*-umlaut of */i/ is explained through the assumption that the assimilation exerted by *[-a] on */i/ was widely resisted in order to avoid a merger of */i/ with ^{*}*/e/.

このことはとりわけ強変化動詞について言えるであろう。すでに Hock (1973 : 340) が指摘しているように、強変化動詞第1類の過去分詞がもし規則的に $i > e$ の a-ウムラウトを起こしていたならば、それは第5類の過去分詞と混同されてしまったであろうということはじゅうぶん考えられることである。他方、 $u > o$ の a-ウムラウトが規則的に起こっているのは、そのような混同とはまったく無縁だったからであろう。

前記(3)の $e > i$ の u-ウムラウトに関して言えば、Beeler (1966) が指摘しているように、Marchand (1957) は北ゲルマン語からの証拠を完全に無視しているようである。前記(3)の例からも明らかなように、古アイスランド語の例を見ると、次音節の [-u] の前では Gmc. /e/ と /i/ の元来の対立が保持されていたことは明らかである。すなわち Gmc. /e/ は古アイスランド語においては [-u] の前では i ではなく $fiql$, $miqðr$ のように iq として現れている。他方、Gmc. /i/ がその位置でそうになっている例は見当たらない。同様に、Gmc. /e/ は次音節の [-a] の前では ia として現れることはあっても、Gmc. /i/ がその位置でそうになっている例は見当たらない。従って $e > i$ の u-ウムラウトの例としてしばしば挙げられる OI $siðr$ が Gk. $éthos$ と同語源であり、IE $*sedhus$ にさかのぼるとする見解は受け入れ難いものである。

現に古アイスランド語にはその語の屈折において次音節に来る要素によって (Gmc. $e > i$) iq , ia を一度にはっきりと示す実例がある。例えば $skiqldr$ 'shield' (Go. $skildus$, OE $sciold$) < Gmc. $*skelduz$, $fiqrðr$ 'firth, inlet' のような u-語幹名詞の活用を挙げてみよう。

		古アイスランド語	原始ノルド語
単数	主格	$skiqldr$	$fiqrðr$ < -uR (Go.-us)
	属格	$skialdar$	$fiarðar$ < -ōR (Go.-aus)
	与格	$skildi$	$firði$ < -iu (Go.-au) < Gmc. -ēu
	対格	$skiqlð$	$fiqrð$ < -u (Go.-u)
複数	主格	$skildir$	$firðir$ < -iuR (Go.-jus)
	属格	$skialda$	$fiarða$ < -ō (a-語幹からの語尾)
	与格	$skiqlðum$	$fiqrðum$ < -umR (Go.-um)
	対格	$skiqlðu$	$fiqrðu$ < -unR (Go.-uns)

Gmc. /i/, /e/ のウムラウトがゲルマン祖語において規則正しく起こることによってこの2つの音素が融合し同一音素となったとする見解は、 $i > e$ の a-ウムラウトが実は不規則であり、またそれがゲルマン祖語に起こっていたとは考えにくいこと、 $e > i$ の u-ウムラウトが明らかに古サクソン語と古高地ドイツ語にのみ特有の現象であること、北、西ゲルマン語におけるウムラウトとは異なるゴート語での Gmc. /i/, /e/ の分布の仕方、そして最後に見た古アイスランド語における状況から判断して、とうてい容認できるものではない。また $u > o$ の a-ウムラウトも不規則な点が多いことや、ゴート語における状況から見て、祖語に起こっていたとは

考えにくい。すなわちウムラウトによって, Gmc. /u/ が Gmc. /u~o/ となったと同時に, それと平行して Gmc. /i/, /e/ が Gmc. /i~e/ となったとする見解が誤りであることは明らかであろう。

参 考 文 献

- Antonsen, E. H. 1961. "Germanic umlaut anew." *Lg.* 37, 215-30.
- Beeler, M. S. 1966. "Proto-Germanic [i] and [e]: one phoneme or two?" *Lg.* 42, 473-4.
- Bennet, W. H. 1952. "The earliest Germanic umlauts and the Gothic migrations." *Lg.* 28, 339-42.
- Braune, W. & E. A. Ebbinghaus. 1989¹⁵. *Abriss der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Cercignani, F. 1979. "Proto-Germanic */i/ and */e/ revisited." *JEGP* 78, 72-82.
- Cercignani, F. 1980. "Early "Umlaut" phenomena in the Germanic languages." *Lg.* 56, 126-36.
- Connolly, L. A. 1977. "Indo-European i>Germanic e: an explanation by the laryngeal theory." *PBB* 99, 173-205, 333-58.
- Connolly, L. A. 1979. "ē₂ and the laryngeal theory." *PBB* 101, 1-29.
- Connolly, L. A. 1980. "Grammatischer Wechsel" and the laryngeal theory." *IF* 85, 96-123.
- Connolly, L. A. 1984. "Altnordisch e<indogermanisch i." *KZ* 97, 267-80.
- Fourquet, J. 1952. "The two e's of Middle High German: a diachronic phonemic approach." *Word* 8, 122-35.
- Gallée, J. H. 1993³. *Altsächsische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Gordon, E. V. 1957². *An introduction to Old Norse*. Oxford: Oxford University Press.
- Gutenbrunner, S. 1951. *Historische Laut- und Formenlehre des Altisländischen*. Heidelberg: Winter.
- Hock, H. H. 1973. "On the phonemic status of Germanic e and i." *Issues in linguistics: Papers in Honor of Henry and Renée Kahane* (B. B. Kachru et al., eds.), 319-51. Urbana: University of Illinois Press.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Krahe, H. 1969⁷. *Germanische Sprachwissenschaft. I. Einleitung und Lautlehre*. Berlin: de Gruyter.
- Lloyd, A. L. 1966. "Is there an a-umlaut of i in Germanic?" *Lg.* 42, 738-45.
- Marchand, J. W. 1957. "Germanic short *i and *e: two phonemes or one?" *Lg.* 33, 346-54.
- Moulton, W. G. 1961. "Zur Geschichte des deutschen Vokalsystems." *PBB* 83, 1-35.
- Twaddell, W. F. 1948. "The prehistoric Germanic short syllabics." *Lg.* 24, 139-51.
- von Kienle, R. 1969². *Historische Laut- und Formenlehre des Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Wright, J. 1910. *Grammar of the Gothic language*. Oxford: Oxford University Press.
- Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English Grammar*. Oxford: Oxford University Press.